

2, 都市として成長する札幌

このように言われる札幌は実際にどんな札幌だったのか、復習のつもりで、もう一度、様子を見てみようと思います。

先ほどの岩佐所長の話に出てきたように、札幌の工場群は、開拓使時代につくられた工場群です。このことは、未開の札幌に工場をつくって近代的な様子を世界に示すためという評価があります。開拓との関係で考えると単純に工場をつくるだけではなく、周辺の村々、当時ですと発寒、琴似、篠路、札幌、丘珠、苗穂といった農村部に移民たちを入植させます。入植させて何かつくらせればいいのではなくて、つくった後、それを流通させるための機関の一つとしてこういう工場群をつくるわけです。そのため、原料となる大麦をつくらせたり、明治20年代になって製麻工場ができればアマをつくらせるというように、つくった作物を商品として買い上げてあげるようにしていたのです。

③の表は、明治30年代の札幌の工場の表です。上から六つ目ぐらまでは、開拓使時代につくられた工場を引き継いだものです。官営工場が民間に払い下げられてから十数年たってもまだ残っているわけです。札幌の工業というと開拓使時代につくった模範工場を中心にその後も発達しているのです。七つ目からは、札幌器械製造所を除いて払い下げ後にできた工場群です。

例えば、この中の野沢活版所、現在の北海道出版企画センターの社長は、先代も今の社長も野沢さんと言いますので、多分、この野沢活版所も今も残っている会社になると思います。それから、山藤という印刷所もまだあります。小林絹糸製造所は、今は小林商事という会社になって、北5条西11丁目ぐらいに大きなビルがありますが、おそらくその会社のことだと思います。明治時代に絹糸会社としてつくったのですが、今は絹糸をやめて総合商社になっているようです。

その次の今井は丸井さんのことです。それから、今井の下の岩井は、今はなくなってしまったのですが、丸井のすぐ隣にあった靴屋さんです。こんな工場群があって、何割かは開拓使時代からの工場で、その後も工場が出来ていました。

先ほどの③表は明治32年ですが、大正の初めごろの札幌の産業の様子を人口で見たら④のようになります。多分、皆さんは、札幌が工業都市だったと言われても、えっと思われるのではないのでしょうか。実は、見ておわかりのとおり、ある時期は工業都市なのです。

農業の生産額、工業の生産額、商業の生産額を比べた表ですが、大正の初めのころは確

明治32年の工場と銀行

明治32 (1899) 年の工場 (職工10人以上)			
工場名	製造品目	住所	創立年
北海道製麻所	亜麻、麻織物、糸	北7東1	明治20年5月
札幌製糸所	製糸、真綿	北1東3	明治20年10月
安田製糸所	製糸、真綿	北1東3	明治23年7月
札幌麦酒所	麦酒、麦芽	北2東4	明治21年1月
岩馬製成舎	酒、醤油、味噌	北2東4	明治11年9月
共成麻札幌支店精米所	精米	大通東1	明治28年5月
大久保煉瓦工場	屋根瓦	月寒村	明治15年5月
鈴木煉瓦製造場月寒分工場	屋根瓦	月寒村	明治19年8月
札幌器械製造所	農具器械	大通東4	明治26年12月
野沢活版所	印刷	北1西3	明治32年8月
札幌活版印刷所	印刷、製本	大通西3	明治19年5月
北門活版所	印刷、製本	大通西4	明治24年5月
於福堂活版印刷所	印刷、製本	南1西4	明治28年11月
山藤活版印刷所	印刷、製本	南2西6	明治29年9月
代田裁縫店	洋服裁縫	北3西3	明治18年6月
小林絹糸製造所	絹糸類	北3西13	明治24年
今井合名会社札幌洋物店裁縫所	洋服類裁縫	南1西2	明治23年9月
岩井製靴店	靴	南1西2	明治11年1月
後藤合名会社木挽所	木材挽き割り	北5西5	明治32年2月
河内硝子工場	硝子器	北7西4	明治32年3月
札幌電灯所	電灯供給	大通西3	明治29年11月

〔北海道庁第14回拓殖年報〕 『新札幌市史』第2巻より
2000年10人以上の工場は、798 (総数2,359)

明治32 (1899) 年の銀行

銀行名	住所	創立年
樺北海銀行	南1西2	明治22年7月
樺札幌貯蓄銀行	大通西4	明治29年4月
樺北海道商業札幌支店	大通西3	明治24年6月
樺日本銀行北海道支店札幌出張所	南1西1	明治26年2月

〔北海道庁第14回拓殖年報〕
2000年札幌の銀行 (地方銀行、長期信用銀行、信託銀行、信用金庫) は、本店と支店合計301 (これ以外に店舗は多数)

かに商業が発達して、大正の半ばぐらいになると工業が商業を超えています。この後、昭和初期ぐらいまでは工業のほうが上を行っています。札幌という、今は商業都市的なイメージが強いのですが、開拓使時代から工業都市の様相が続いているのです。

④

産業別生産価額 (1910~1918年)

年	農林水産業		工業		商業		土木・建設		その他を含む合計	
	価額(円)	構成比(%)	価額(円)	構成比(%)	価額(円)	構成比(%)	価額(円)	構成比(%)	価額(円)	構成比(%)
1910	194,134	1.4	2,961,087	21.7	7,945,023	58.2	2,540,925	18.6	13,641,169	100.0
1911	400,726	2.8	3,102,238	22.0	7,628,325	54.2	2,945,266	20.9	14,076,559	100.0
1912	589,574	4.1	3,562,149	24.6	8,344,816	57.5	2,010,095	13.9	14,506,634	100.0
1913	434,593	2.9	3,974,263	26.3	8,425,478	55.8	2,258,205	15.0	15,092,539	100.0
1914	361,656	2.4	4,191,075	28.1	7,873,083	52.7	2,499,496	16.7	14,925,310	100.0
1915	511,995	4.0	4,117,337	32.3	5,871,631	46.0	2,260,510	17.7	12,761,473	100.0
1916	716,853	3.5	10,635,119	52.1	7,024,273	34.4	2,023,009	9.9	20,399,254	100.0
1917	944,211	4.3	8,996,251	41.3	9,765,479	44.9	2,060,309	9.5	21,766,250	100.0
1918	1,757,949	5.1	17,049,887	49.2	13,493,004	39.0	2,338,382	6.8	34,639,222	100.0

『新札幌市史 第3巻通史3』より作成。1位の業種を太字で、2位の業種を斜体で示した。

むしろ、ある時期、商業のほうが上回っている時期があったと考えたほうがいいかもしれません。ただ、これは生産価格ですから、商店の数、事業所の数、労働者の数になると若干の違いは出てきます。札幌は、工業都市であったことを知っておいていただければと思います。

次は、資料⑤-1の絵はがきを見てみましょう。

⑤-1

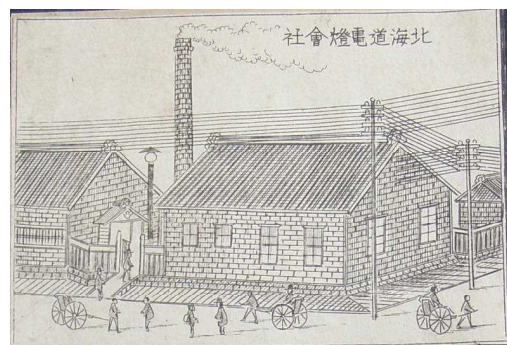
都市の発展の一面を示す絵はがきです。この絵はがきを何のために出版されたか、理由はよくわかりませんが、これは明治40年前後の絵はがきだと思いますが、女性が自転車に乗っています。この時代は、明治35(1902)年6月4日には「婦人の自転車乗り(当地の率先者)」と題して、街中を自転車で疾走する若婦人が新聞記事になるぐらいに自転車が普及してきていたようです。その写真がその事を示すものだと思います。見方によっては、女性が社会進出を始めたという意味の紹介にもなるかもしれませんが、むしろ新聞は揶揄するような記事でした。



この絵はがきの右下に「停車場通」とあります。奥の方にちょっと見えるのが札幌駅です。真ん中に広く写ってるのは、駅前通(停車場通)で、ちょうど自転車が走っているあたりが大通です。今の大通や駅前通のあたりと比べると不思議なものが写っています。右端に写っている煙突や工場のようなものも見えています。私はこの絵はがきを初めて見たとき、ここは絶対に駅前通ではないと思って、ほかの場所でこういう工場があるところをいろいろと捜しました。何とか発見することが出来ました。

⑤-2の絵に描かれている工場の様なものは、

⑤-2



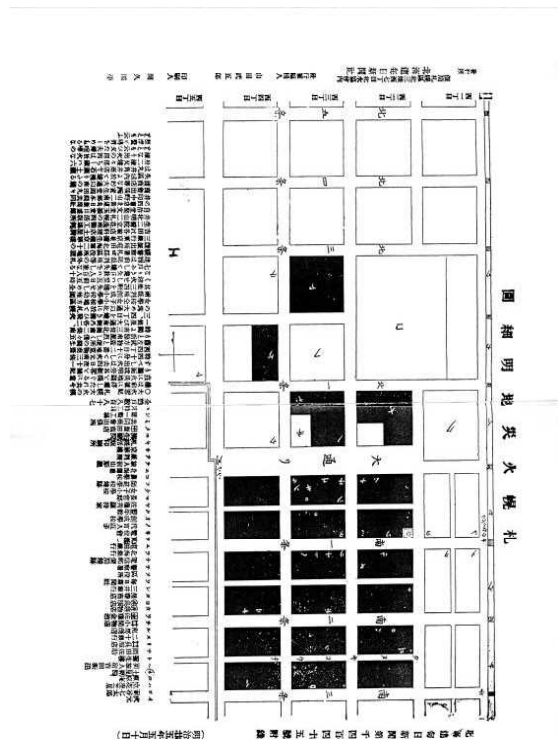
上に「北海道電燈会社」と書いています。この電灯会社は、明治22年に設立された札幌市の中に電気を配信した会社です。当時は火力発電が主流です。この石造りに見える建物は発電所とすることになります。何でこんな街中に発電所をつくるのか、発電所といたら最初は水力ではないか、山の中ではないかと推測してしまいます。全国的に言うと明治20年代ぐらいに火力発電中心から水力発電中心に発電の仕方が変化していきます。札幌は、明治22年になって初めて火力発電所が設立されたのですが、まちの真ん中に置かれました。恐らく、当時は技術的な問題もあって山の中から長距離を引っ張ってくると、電圧が下がるためなのだそうです。一番コストをかけないで簡単に電気を売れるのは、街の中につくって周辺に供給することです。前回の講演につけ加える格好になるのですが、明治20年代、30年代に都市の機能がだんだん整備されていって、その一つがこの発電所の設置です。札幌にも発電会社ができ電灯がつくようになりました。③の表の一番下にある札幌電燈が明治29（1896）年に北海道電燈会社から社名を変更します。32年には工場の中に発電所も入っています。

都市機能が整備されるとこんな問題も起こりました。⑥の「札幌火災地明細図」は新聞の号外ですが、明治25年に887戸が燃えた大火災があります。札幌で今までに起こった火災で一番大きなものです。これに次ぐのは、明治40年に三百数十戸が焼けた大火がありました。札幌に都市機能が整備されてきて人が集まり、人口が急増し始めたころにこの大火が起りました。恐らく、家屋そのものが火災に対処した家屋ではなかったようで、この後市民に耐火建築が求められていました。

⑥の図は、その時に燃えた場所の地図です。明治25（1892）年5月10日付の北海道毎日新聞号外で、5月4日に南3条西3丁目の個人宅から火事が起こって燃え広がり三町四方全部燃えて、なおかつ大通を越えて北側も延焼しました。

代表的な施設を地図の端に列記しています。多くの施設が燃えています。明治20年代、30年代は、都市機能が成長し始めて整備されていくのですが、そのつまずきみたいなことも起こります。この火事後、札幌では再建ということが課題になりますが、ちょうどその頃に「札幌盛衰論」という記事が新聞に掲載されました。20年代前半は、人口がどんどん急増していましたが、25年にこの大火があってその好況が終わりました。ちょうどその頃から道庁がやっていた札幌周辺の原野排水などの公共投資も少なくなってきました。そ

⑥



のような中で27年に「札幌盛衰論」という記事が掲載されるのです。その頃が不況の真っ最中だったのです。明治20年代を見通して、すごく盛んだった時代が火事を境目に急激に衰えていった。そこで札幌はどうなるだろうかという新聞記事が掲載されました。先ほどの岩佐所長の「札幌衰亡論」とは違い盛衰論の場合は景気がよかったのが悪くなった、それをどう解消していったらいいかという記事です。都市としての機能が上がっていく反面、こんな問題も起きながら成長していくというのが20年代、30年代です。その真っ最中に先ほどの岩佐所長が発言する形になっているのです。

そういう中で、北海道でも都市を意識し始めるのか、大正に入るところから、都市経済とか都市比較というものが新聞記事に出ようになっていきます。このことは、日本の社会全体が産業革命を経て工業化している時代なのです。今、人口が集まっているいわゆる太平洋ベルト地帯の京浜から東海、中京、阪神、瀬戸内の地域に日本の人口の大多数が集まっていますが、そのようなことが始まるのが、明治20年代から30年代にかけての時期からなのです。そのようなことを考えてみると、人が多く集まってくる地域・都市がいろいろな面で分析されるような時代になったのです。

⑦は、大正2年の北海タイムスの新聞記事ですが、北海道の都市比較をしています。都市経済状態の比較です。大正の初め北海道の都市にはこういうものがあり、どんなふうに

違ふかという比較です。上に都市の名前が並んでいます。函館、小樽、札幌、旭川、増毛、留萌、室蘭、網走、釧路、根室が都市として比較されています。恐らく、この時代より少し前だと岩内や余市も入っていると思います。それよりも少し前は、寿都、江差、松前もこの中に入り、逆に開拓が始まる前の旭川、網走などは入らないでしょう。特にニシン漁業がだんだんだめになっていったこと

⑦

都市名	人口	戸数	税額	税人員	同額	同額	同額	同額	同額
根室	1,200	100	100	100	100	100	100	100	100
釧路	2,000	150	150	150	150	150	150	150	150
網走	1,500	120	120	120	120	120	120	120	120
室蘭	3,000	200	200	200	200	200	200	200	200
留萌	1,000	80	80	80	80	80	80	80	80
増毛	1,200	100	100	100	100	100	100	100	100
旭川	2,500	180	180	180	180	180	180	180	180
札幌	10,000	800	800	800	800	800	800	800	800
小樽	1,500	120	120	120	120	120	120	120	120
函館	15,000	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200

で、漁業都市であった岩内、余市、寿都が落ちていきます。逆に、まだ残っているのが留萌、増毛ということなのだろうと思います。今の都市と違う感覚で都市が挙げられています。

この中で、札幌、小樽、函館を見ると、ほかの都市とどの数字も一桁違うのがおわかりだろうと思います。この資料は、今の都市とは違う感覚の都市があったというおもしろさがあったのでお見せしました。岩佐所長の話で着目するのは旭川のことです。大正2（1913）年では、街づくりが始まってまだ20年ぐらいです。しかし4番目の人口を持つような都市となっています。税金を見ても4番目の力を持つような都市となっています。先ほどの岩佐所長の予測は一部当たっているわけです。札幌は衰退していませんから外れていますが、旭川がこういう位置づけになってきています。

10年後の大正12（1923）年には、札幌市、函館市、小樽市、旭川市、室蘭市に都市計画法が施行されます。それまでは東京や大阪などの巨大都市にしか適用されていなかった都市計画法が全国の25の都市に拡大し、その25都市の中に北海道から5つ入っていて、その一つとして札幌も都市計画法が施行されます。つまり、都市として認められて、国から都市計画法に基づく資金が出て、都市整備をより強力に行えるような体制になります。

都市機能の一つである交通機関整備について考えてみますと、明治末から馬鉄が市内を走りはじめます。大正7（1918）年には、市中の交通機関が馬鉄から電車に変わります。大正12年にはバスも走り始めます。都市札幌の中の交通の維持、都市交通が発達してくる時期になります。それが昭和の初めには、交通機関もさらに発達して、公共都市交通にしなければならなくなり、市営交通ができます。まず、昭和2年に電車が市営化します。昭和5年には市営バスの営業が始まります。そういうふうにして都市札幌の都市整備の一つとして、交通機関の整備をして都市機能を向上させようという時期になっているのが明治の半ばから昭和の初めということになります。

そういう時代の流れの中に札幌に関する岩佐所長の評価がありますが、逆に札幌はどんなふうになって大都市の要件を持ってくるのかを見ていきましょう。

3. 道都札幌の確立

都市として、都市機能も上がっていて、人口もふえてきた時期に、こんな事件が起こります。ここに書いてあるとおり、火災中の北海道庁です。明治42（1909）年1月11日夜、北海道庁舎であった赤れんが庁舎が、火災になって全焼します。⑧-1の写真でもわかると思いますが、既に屋根が見えません。屋内が燃えているのもわかります。⑧-2の写真では下に「全焼翌日之撮景」と書いてあるとおり、燃えた後は屋根が全くなくなって、煙突と外壁だけが残り中は完全に全焼しているようです。

実は、火災後の写真と火災中の写真と燃える以前の赤れんが庁舎の3枚セットの絵はがきが売り出されています。商魂たくましいと言うのか、タイムリーに撮りに行く根性もあったということだろうと思いますが、おかげでいい写真が残っています。

道庁が焼けてしまったという話は先ほどの岩佐所長の話と結びついてきます。35年に岩佐所長は、道庁が札幌からなくなったらどうなるかという話をしました。実際に7年後に

⑧-1

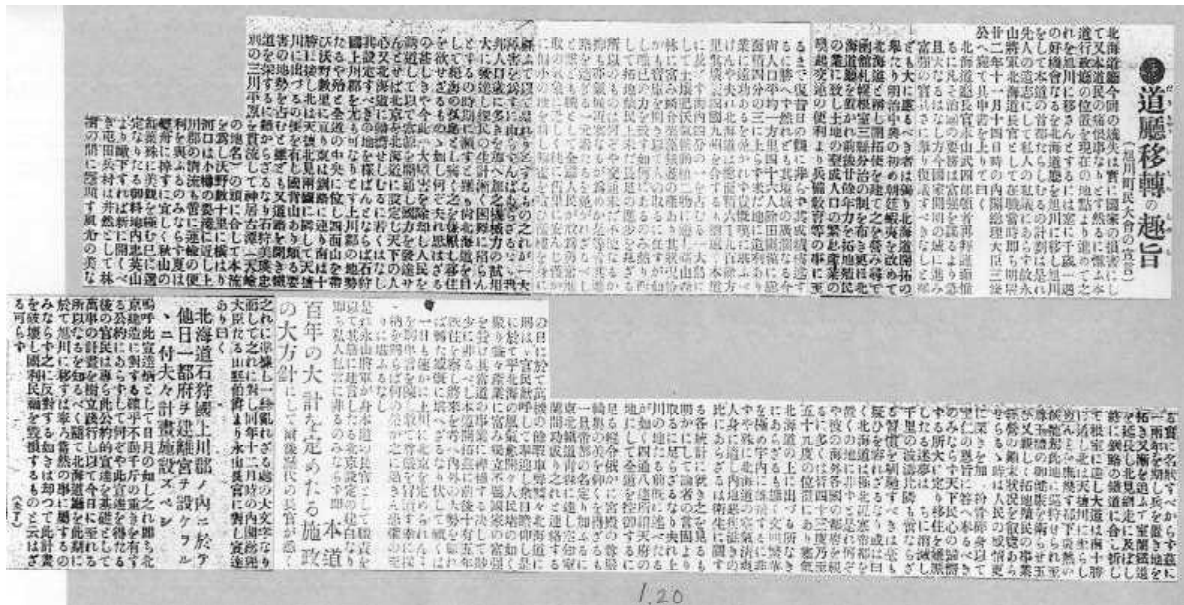


⑧-2



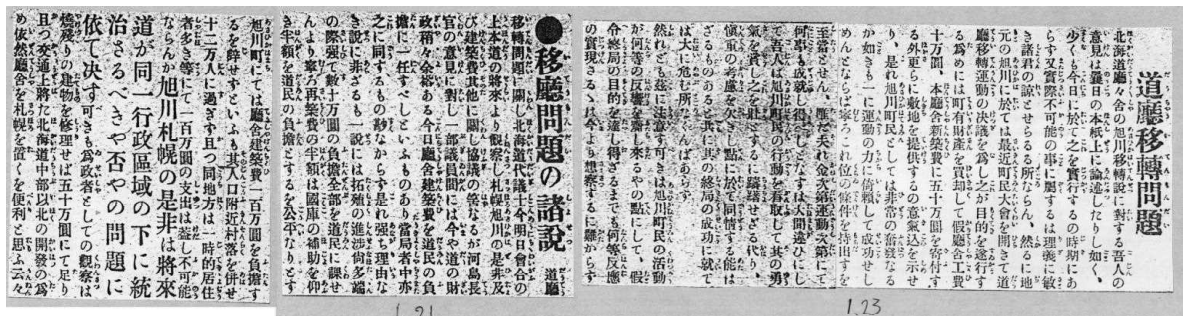
なくなりました。役所としてはすぐなくなるわけではなく、どこかに移って仕事をしなければいけないのですが、建物としてなくなりました。では、どうす

⑨-1



⑨-2

⑨-3



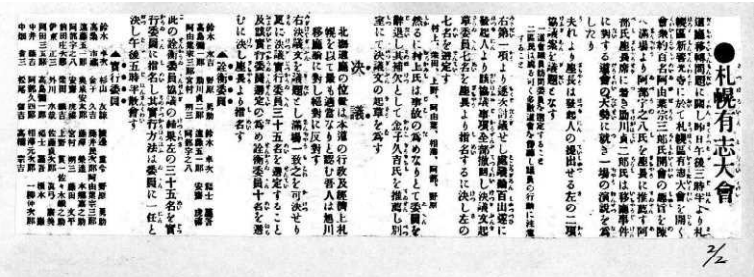
⑨-4

⑨-5

るかという話が起こってきます。

⑨-1~6は、北海道庁が火事になった後、旭川へ移転するかどうかに関する新聞記事です。⑨-3の新聞記事を紹介しましょう。42年1月15日頃から「道

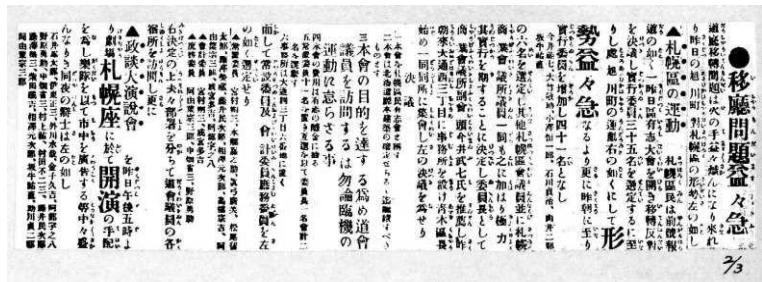
庁移転問題」という記事が載るようになります。岩佐所長の



⑨-5



話と結びつけて考えると、奥地の開拓が進んできたら道庁は移っていきなう、移したほうがいいなうという意見が出される様になつてた訳です。そういう時に、道庁が燃えてなくなつてしまいました。



それを再建する場所が道庁所在地になるという形になりました。もちろん、議論としては北海道庁舎を再建するという意見、北海道庁舎の中身が焼けてしまったから同じところに役所をつくるという意見もあったようです。ところが、旭川では、これを機会に旭川に道庁舎をつくらうという運動を始めます。それを新聞が取り上げたものです。

話の中心は、この新聞記事に凝縮されています。この記事の中には「本庁舎新築費に五十万円を寄付す」とありますが、旭川市民たちが市民大会を開いて、50万円を寄付しようという意見を出しています。

他の記事では、旭川町にて庁舎建築費100万円を負担すると載っています。この記事には、募金の事は載っていませんが、ちょうど赤れんがが全焼した時に、これを機会に旭川で活動を始めたことを報道する記事です。その方法も、移転費や建築費を負担してでも旭川に移そうという運動になったわけです。

北海タイムスだけでなく小樽新聞は、道庁を旭川にとられたらまずいという記事を載せています。そのため、札幌側も頑張りはじめ有志大会を開いて、旭川だけが盛り上がるのではなくて札幌も盛り上がろうとしました。

この頃、先ほど述べたように日本の工業の発達や資本主義の発達する時期が、農村にいた人口が太平洋ベルト地帯に移動し始める時代です。それにあわせて、北海道へ移ってくる移住者も急激にふえてきます。北海道への移住者が多いのは、明治後半から大正初めぐらいです。ということは、北海道の行政をつかさどる道庁は忙しくなり、組織上も大きくなっていく時期です。札幌にある本庁内での仕事量もふえてくるということは、役人の数もふやすという時代になっています。道庁は、当時、庁舎の拡張の予算案を提出しようとしていた時期でした。そこで、本庁が焼けてしまったので、本庁がどこに移るかというより、再建をどうするかという議論が道議会の中でも起こり始めました。そのときに火事になったのです。ただ、明治42年2月5日に道議会が開かれて、札幌で庁舎を再建し赤れんが庁舎の周りに増築するという予算案を提出したら、大多数の議決で案が通ってしまいました。道議会の「北海道議会史」という本によると、道議会の中ではほとんど何も議論がありませんでした。確かに旭川は多数派工作をやったらしいのですが成果が出なかったようです。

2月3日付の新聞記事の見出しでは、移転問題は益々急となっていますから、大きな問題だったのですが、結果的には道議会ではほとんど何も問題にならなかったのです。岩佐

所長の先ほどの話ですが、チャンスはありましたが、結局、道庁は動かなかったのです。

そんな時期の札幌は全道の中でどんな位置づけだったか、先ほどは大正2年の都市を比較して見ましたが、もう少し違う資料でも見てみましょう。先ほど新聞に載った都市比較は税金の比較でした。次は、人口で見た産業の比較をしてみます。

⑩ - 1

は、大正9
(1910)年
の第1回国
勢調査によ
る人口比較
です。これ
は総人口で
はなく有業
者人口とい
う仕事につ
いている人
たちの人口
の比較です
。そのた

⑩ - 1

	北海道		札幌区		小樽区		函館区		旭川区		室蘭区		釧路区	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
総数	1,062,914	100.0	41,365	100.0	42,907	100.0	57,919	100.0	27,990	100.0	21,722	100.0	16,085	100.0
1 農業	483,921	45.5	2,023	4.9	1,512	3.5	1,175	2.0	1,583	5.7	1,129	5.2	638	4.0
2 水産業	89,689	8.4	119	0.3	651	1.5	5,971	10.3	38	0.1	898	4.1	1,775	11.0
3 鉱業	39,378	3.7	211	0.5	129	0.3	129	0.2	25	0.1	92	0.4	819	5.1
4 工業	139,605	13.1	13,540	32.7	9,704	22.6	13,609	23.5	6,415	22.9	8,748	40.3	3,545	22.0
5 商業	121,976	11.5	9,805	23.7	13,700	31.9	15,504	26.8	6,394	22.8	3,662	16.9	3,772	23.5
6 交通業	65,417	6.2	4,207	10.2	7,041	16.4	9,305	16.1	1,978	7.1	2,640	12.2	2,315	14.4
7 公務自由業	49,188	4.6	4,794	11.6	3,080	7.2	3,959	6.8	8,422	30.1	1,328	6.1	1,045	6.5
8 其他ノ有業者	51,040	4.8	2,409	5.8	4,969	11.6	4,775	8.2	1,442	5.2	2,704	12.4	1,643	10.2
9 家事使用人	502	0.0	35	0.1	73	0.2	47	0.1	27	0.1	37	0.2	10	0.1
10 無職業	22,198	2.1	4,222	10.2	2,048	4.8	3,445	5.9	1,666	6.0	484	2.2	523	3.3
総数に無業者を含む														
	北海道		札幌市		小樽市		函館市		旭川市		室蘭市		釧路市	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
総計	1,207,677	100.0	58,104	100.0	53,410	100.0	75,367	100.0	33,463	100.0	19,416	100.0	19,740	100.0
1 農業	544,410	45.1	1,703	2.9	1,191	2.2	1,284	1.7	1,737	5.2	952	4.9	614	3.1
2 水産業	116,336	9.6	90	0.2	633	1.2	9,201	12.2	18	0.1	944	4.9	4,033	20.4
3 鉱業	27,932	2.3	117	0.2	54	0.1	73	0.1	30	0.1	58	0.3	778	3.9
4 工業	147,882	12.2	16,849	29.0	12,850	24.1	16,388	21.7	8,029	24.0	5,236	27.0	3,357	17.0
5 商業	156,608	13.0	17,278	29.7	16,229	30.4	20,575	27.3	9,143	27.3	3,663	18.9	4,390	22.2
6 交通業	64,682	5.4	3,779	6.5	9,491	17.8	8,676	11.5	2,096	6.3	2,713	14.0	2,415	12.2
7 公務自由業	80,556	6.7	11,563	19.9	6,162	11.5	8,267	11.0	9,847	29.4	2,274	11.7	1,877	9.5
8 其他ノ有業者	26,306	2.2	2,940	5.1	2,526	4.7	3,363	4.5	1,109	3.3	517	2.7	646	3.3
9 家事使用人	42,965	3.6	3,782	6.5	3,825	7.2	7,557	10.0	1,454	4.3	3,059	15.8	1,630	8.3
10 無職業	1,604,658		110,475		91,926		121,868		49,051		36,439		31,846	
総数に無業者は含まない														

め15歳未満は入っていません。例えば、北海道は、総数で106万人になっていますけれども、この頃の総人口は180万人ぐらいです。

札幌の様子を見てみましょう。有業者の総数は4万人ぐらいですが、総人口は10万人ぐらいです。そのうちの働いている人が4万人ぐらいということです。これは人口で比較した産業の様子ですから、生産額とは違う意味になりますが、それでも傾向はわかると思います。札幌は、先ほど言ったように工業都市と言えます。32%以上が工業の従事者になります。その次が商業関係です。ほかのまちと比べてみますと、小樽だと商業が中心で、港を有効利用しているという意味になりますが、その次が工業ということになります。函館は、商業が若干強いでしょうか。この3区で比べると、函館が2区の上であることは直ぐわかりますが、小樽と札幌はどちらが上か下か、工業は札幌、商業は小樽が上で、総人口でも、どちらも10万人ちょっとぐらいですから、大正9年では横並びに近い感じです。

しかし、違う分野に公務自由業がありますが、公務自由業ですから公務員だけではないですが、ほかの自由業がどんなものかわかりませんが、とりあえず公務員と考えてみましょう。4万4,700余という数字は、小樽や函館に比べて多いです。役所で働く人間が多いのです。でも、旭川はさらに多くなっています。旭川は、明治29年に7師団といって軍隊が札幌から移りました。札幌には、月寒に二五連隊がつくられますが、それよりもレベルが上の軍隊組織の役所が旭川につくられます。大半が軍人になると思いますが、公務員と

すると旭川のほうが多いのですが、恐らく、役人よりは軍人と思われます。札幌にも月寒に二五連隊がありますが、駐屯地は豊平町で札幌区ではありません。そのため、二五連隊の軍人たちは入っていません。純粋に公務員だけということにはならないかもしれませんが、公務員を中心とするサラリーマンたちだと思います。この四都市で考えてみると、工業都市の札幌、商業都市の小樽、函館、軍都の旭川ということです。

⑩-1表の下は、10年後の国勢調査です。

3市の総人口はレジメにあります。昭和5年の国勢調査の人口で、函館が19万人、札幌が16万人、小樽が14万人で、札幌は小樽を超えた時期です。この時期になると、札幌は商業が多くなっています。小樽と函館は同じです。公務員に関して見ると、旭川と札幌を比べると札幌が追い抜きました。道内の都市は人口がふえている時期ですが、その中で札幌の性格を見ていくと、先の四都市を比べると、商業、工業が多いのは似た傾向ですが、札幌の特徴の一つは、公務員が増えているということです。それも、10年で旭川よりふえて、軍人を入れても旭川より多くなっているというのが札幌の位置づけの変化になるようです。

昭和15年の同じ数字を比べたかったのですが、見つけることが出来ませんでした。総人口は札幌が1位になりますから、それに見合う数字の変化になっていると思います。有業者の割合は変わらないということにします。

次の⑩-2は、会社数の比較です。商業も工業もあると思いますが、会社の比較を3市でしてみました。これは、資本金額を比べると大正末頃から札幌が1位になって、小樽、函館との差がひらいていく様子がわかります。総人口は、函館、小樽、札幌ないしは函館、札幌、小樽の順位ですが、会社の資本金額の総計でいくと札幌が増えていって、強くなるのが昭和の初めのことであることがわかります。さらに、この数字を見ると、違うこともわかってきます。例えば、大正11年、札幌の資本金と会社、小樽の資本金と会社、函館の資本金と会社の数を見ていくと、1社当たりの平均資本を見ると、札幌がずっと大きい事がわかります。このことから、札幌のほうが大企業が多いということになると思います。

全道で見ても、札幌がどんどんシェアを大きくしていく、単純に工業、商業というだけではなく、札幌の経済力が大きくなって、函館、小樽を凌駕していく時期になります。

さらに⑩-3は、こういう数字もあります。蝦名さんという学者がつくった数値です。どの時代も札幌を100にして函館と小樽と比べている表です。

例えば、銀行の預金です。各都市の資金力と言ったらいいでしょうか。札幌は昭和のは

⑩-2

年	札幌		小樽		函館		全道	
	資本金額	会社数	資本金額	会社数	資本金額	会社数	資本金額	会社数
大11	25,999	109	26,170	390	41,828	288	146,875	1,877
大12	28,340	107	29,207	443	44,120	285	146,268	1,865
大13	36,149	147	27,856	340	44,517	293	153,878	1,815
大14	31,387	124	20,181	257	29,710	206	117,019	1,467
昭1	35,156	133	23,871	271	30,047	200	124,139	1,493
昭2	39,559	138	24,835	280	37,809	189	143,685	1,612
昭3	44,159	170	29,927	346	31,396	196	147,828	1,823
昭4	51,894	199	31,486	358	35,147	234	161,136	1,963
昭5	45,598	184	32,413	401	25,704	254	146,714	2,155
昭6	48,045	229	34,025	483	27,360	294	151,188	2,489
昭7	51,103	271	44,374	510	28,789	348	166,636	2,748
昭8	51,590	323	43,042	511	29,571	342	169,217	2,861
昭9	55,471	370	44,596	524	30,036	300	178,860	2,995
昭10	55,000	404	47,361	559	29,741	313	185,905	3,142
昭11	-	-	-	-	-	-	-	-
昭12	61,012	378	51,356	582	37,046	361	231,238	3,303
昭13	62,260	370	54,925	582	52,783	356	264,514	3,165

(各年『北海道庁統計書』『新札幌市史 第4巻通史4』)

じめに函館、小樽より上になっているのがわかります。

⑩ - 3

それに対して表の右側は、手形交換高ですから、商売の強さの額と言ったらいいのでしょうか。それを見ていくと、小樽、函館のほうがずっと多かったのが、昭和10

札幌・小樽・函館三都市における銀行預金および手形交換高比較

	銀行預金				手形交換高			
	札幌	小樽	函館	全道対比(札幌)%	札幌	小樽	函館	全道対比(札幌)%
大正8年	100	276	136	14	100	774	423	8
13年	100	155	102	18	100	677	298	9
昭和4年	100	119	95	22	100	313	200	15
9年	100	56	86	25	100	287	154	17
14年	100	111	80		100	237	109	20
21年	100				100	25	16	63
26年	100	42	25	41	100	49	22	49
31年	100	39	30	31	100	46	27	46

『札幌経済』5巻8号「札幌市の発展と性格の変貌」『札幌市の都市形成と一極集中』

年代の後半になると札幌のほうが強くなってきています。大正、昭和と進んでくるに従って、経済力、資本力とかいろいろな分野で、北海道の中で札幌がどんどん力をつけてきて、函館や小樽を抜いてより強くなってきている様子が見られます。これらの数字を見ると、昭和前半、戦争の最中ぐらまでの期間の中で札幌が1位になっていくのがわかります。

そういうことがどうして起こってくるのかというものの一つの答えは、先ほどの岩佐所長の話に出てくる道庁移転云々の話です。⑩-1では、道庁に限らず、いろいろな役所が明治の末から大正、昭和になるに従って札幌に集まってくることを書かれています。これは、『札幌区史』という明治44年につくられた札幌の歴史書ですが、北海道を総括するような国の出先機関が札幌にふえてきていると指摘しています。札幌税務監督局や北海道鉄道管理局など国の出先機関などの役割を紹介すると同時に、北海道を管理するような国の出先機関が札幌にふえてきていることを指摘しています。それより下のレベルの出張所はほかの都市にも置かれるでしょうが、役所の上のレベルの出先機関が札幌で増えていっていることと書いています。恐らく明治末の同時代史的に感じていることを記述しています。

⑪ - 1

又全道の特種事務統轄の各官衙は多く札幌に在り。札幌税務監督局は、函館税務署以下十四税務署を統轄して全道の税務を統一し、札幌税務署は其地方的の一署にして、札幌區及札幌千歳、石狩、厚田、濱益五郡の税務を處理す。北海道鐵道管理局又札幌に在りて、全道の鐵道經營を統轄し、札幌鑛山監督署又全道の鑛山行政を掌る。札幌逓信管理局は、札幌に在りて、全道の郵便、電信、電話、電氣事業監督の一部及本道並に青森、秋田縣下の海事に關する事務をも總て統理し、全道に互る三百九十八郵便局、二百五十三電信局及八十四公衆電報取扱所を統一せり。又帝室林野管理局札幌支廳は、全道に互る帝室の御料財産を管理し、其他北海道廳度量衡檢定所、北海道物産陳列場、北海道農事試驗場、蠶業講習所、蠶病豫防事務所等全道の官署皆札幌に置かる。尙全道に互れる統一的のものにあらずと雖も、本道内を區畫したる地方的の統一官署亦多く札幌に置かる。札幌營林區署、札幌土木派出所、札幌税務署、札幌聯隊區司令部、札幌憲兵分隊、札幌地方裁判所、札幌區裁判所、札幌監獄等即ち是なり。札幌の地は實に此の如くにして政治上に於て全道統一的なると共に、又先進模範的地位にあるなり。

⑩-2表を見てみましょう。

これは、『新札幌市史』にある札幌に置かれた官公署の表です。同じような表が、函館や小樽、そしてほかの都市にもないかと思って探したのですが、見つけれませんでした。そのため他都市との比較はできませんが、札幌だけ示します。

大正7（1918）年にあった道関係と国関係の役所、昭和12（1937）年にあった道関係と国関係の役所、12年以降にできた役所を表にしたものです。表を見るとランクの下のレベルも含めている場合もあります。そのためこれが正しい数字かどうかははっきりわかりませんが、おおむね傾向が出てくると思います。国の出先機関がいろいろ札幌に集中していま

国や道の施設

大正7年			昭和12年			昭和12年以降に設置された施設		
道庁	北海道庁	北3西6	北海道庁	北3西6	海軍地方人事部	昭和12		
	北海道会	道庁構内	北海道会議事堂	道庁構内	地方専売部	昭和13		
	同札幌支庁	北2西5	石狩支庁	北2西5	陸軍被服本廠派出所	昭和13		
	札幌警察署	北1西5	札幌警察署	北1西5	職業紹介所(市立から国営)	昭和13		
	巡査教育所	道庁構内	北海道庁警察練習所	道庁構内	造幣局出張所	昭和14		
	度量衡検定所	道庁構内	北海道度量衡器検定所	道庁構内	帝室林野局林業試験場	昭和15		
	札幌一等測候所	北8西9	札幌气象台札幌支台	北8西9	北部軍司令部	昭和15		
	土木派出所	道庁構内	札幌土木事務所	北2西19	札幌酒類局	昭和17		
	農事試験場	北20西8	札幌治水事務所	南16大水門前	鉄道省札幌地方施設部	昭和17		
	同登革講習所	北1西19	北海道農産物検査所札幌支	北3西1	札幌電気電信工事局	昭和17		
	養蚕取締所	北3西7	北海道農産物検査所	北3西7	札幌少年審判所	昭和17		
	種畜場	真駒内	北海道畜産取締所	北4西4	札幌地方燃料局(酒精局改)	昭和18		
	札幌営林区署	道庁構内	札幌営林区署	北1西14	北部憲兵隊司令部	昭和18		
	同札幌森林監守駐在所	札幌営林区管内	北海道産業講習所	北2西7				
物産陳列場	中島公園	北海道自治講習所	北2西7					
感化院	藻岩村							
司法警務機関	札幌地方裁判所	大通西13	札幌控訴院	大通西13				
	札幌区裁判所	大通西13	札幌地方裁判所	大通西13				
	同検事局	大通西13	札幌区裁判所	大通西13				
	同執達吏合同役場	大通西14	札幌刑務所支所	大通西14				
税務礦務帝室林野機関	札幌監獄札幌区出張所	大通西13	札幌税務監督局	大通西7				
	札幌税務監督局	大通西7	札幌税務署	大通西7				
	札幌税務署	大通西7	札幌山監督局	北1西18				
	札幌礦務署	北6西5	帝室林野局札幌支局	北2西1				
軍事機関	帝室林野管理局札幌支局	北1西2	札幌陸隊区司令部	大通西10				
	同札幌出張所	北1西19	札幌憲兵分隊	北1東2				
	同札幌分担任員駐在所	北1西19	陸軍糧秣本廠札幌派出所	雁木町				
	札幌陸隊区司令部	北1西10	札幌地方海軍人事部	北1西1				
鉄道機関	札幌憲兵分隊	大通東2	札幌飛行場	北24西5				
	鉄道管理局	北5西4	札幌鉄道局	北5西4				
	同札幌運輸事務所	北5西3	札幌鉄道病院	北3東1				
	同通信区	北5西3	札幌鉄道局苗穂工場	苗穂町				
	同札幌駅	北6西3	札幌運輸事務所	北5西4				
	同苗穂駅	苗穂町	札幌駅	北5西3				
	同札幌機関庫	北6西3	苗穂駅	北3東12				
	同札幌保線区	北5西3	桑園駅	北9西15				
	同札幌保線事務所	駅構内	豊平駅	豊平5の9				
	同列車電灯所	駅構内	札幌通信局	大通西2				
通信機関	同札幌列車従事員詰所	駅構内	札幌郵便局	大通西2				
	同札幌本倉庫	北3西1	札幌鉄道郵便局	大通西2				
	鉄道院札幌工場	苗穂町	市内三等郵便局	北5西4				
	通信局	大通西2						
	札幌郵便局	大通西2						
	札幌鉄道郵便局	大通西2						
	通信生育成所	南7西1						

『札幌市統計一斑』昭和12年

『札幌案内』大正7年『新札幌市史』第3巻通史3

す。皆さんが知っているのは、車検をとる時に利用する陸運局でしょう。しかし私もそうですが、大体は車屋さんにて代行してもらっているのです。直接、市民が国の役所にかかわることは余りないかもしれませんが、陸運局のような国の地方統括機関が札幌にふえてきたのが明治末から昭和初期になります。

こういう施設がふえてくると、銀行も集まってくるだろうと推察できます。銀行などは国などの役所の資金を預けておく機関です。今でもそうですが、どこの役所へ行っても銀行や地域の信用金庫などの金融機関が役所のフロアにお金の支払い口として必ずあります。役所があるとそれぞれそういう金融機関が常に位置づけられています。そのため役所ができれば金融機関もふえていく、役所が多ければ多いほどそれにかかわる銀行がふえてくるようになります。

⑪-1は、昭和10年ぐらいまでの数字しか見つけられなかったのですが、全道のいろいろな都市にある銀行の数を表にしたものです。上の方だけ見てみましょう。札幌、小樽、函館、旭川ぐらいまでを見ると、昭和10年まででは、小樽、函館、札幌という順番になっています。旭川、室蘭、帯広が銀行の多い都市になっています。昭和10年ぐらいまでの上

位四都市の比較をすると、小樽、函館、札幌、旭川の順番になっていることがわかります。この数字がこの後どうなるか、本当は一番知りたいところだったのですが、残念ながら見つけれませんでした。

ただ、先日「ブラタモリ」というNHKの番組が小樽を舞台としていましたが、小樽の銀行の話も出ていました。小樽には大正の末ごろに銀行が25あったと言っていました。私が見付けた数字は16とか18ですから、この『北海道庁統計書』とは違う統計数字がほかにもあるかもしれません。小樽だけでなく他都市ももっとあった可能性もあります。一応、道庁統計書ではこういう数字になっています。

なかなか数字が見つからないので⑫-2に札幌での銀行の動きを表にしてみました。実際には明治の初めからの表をつくったのですが、きょうの話に合わせて大正、昭和の部分と戦後を表にしています。

例えば、昭和11年11月、横浜正金銀行というと全国の銀行です。今でいうと都市銀行に入るような銀行ですが、その支店が小樽につくられています。小樽の経済力に引

っ張られて小樽に支店をつくっているようです。12年になると日本興業銀行が札幌に支店をつくっています。こちらは札幌に引っ張られてきているということでしょう。

昭和14年頃から、銀行の合併が目立ちます。これは、銀行に限らず、日中戦争が始まって、太平洋戦争へ進んでいく中で、無駄な経済競争はやめろという政府の指令で、企業合同をさせました。タクシー会社とかバス会社とかいろいろな会社が企業を一つにしていきます。ビール会社も大日本ビールに統一されます。タクシー会社は、北海道では平賀という会社1社になり、バスも中央バス1社になっていきます。新聞も、地方の都市でそれぞれ出ていましたが、戦争を昭和17年に全道の新聞社が合併して今の北海道新聞になるわけです。表に戻るとこの戦争の時期に、拓銀に合併とか、道銀に合併とあるのは、国策のによって合併していくのです。戦争中には、北海道の銀行は最終的に拓銀に統一されてしまいます。

金融界で注目されるのは、17（1942）年に日本銀行が札幌支店を開きました。さっきの

戦前期の北海道の銀行

	明治43年	大正4年	大正9年	大正14年	昭和5年	昭和10年
札幌	8	11	10	13	12	12
小樽	13	17	18	16	18	18
函館	9	13	15	15	15	15
旭川	4	7	8	6	7	7
岩見沢	2	2	2	3	3	3
岩内	3	2	1	2	2	2
寿都	1	1	1	1	1	1
江差	2	2	2	1	1	1
室蘭	2	2	2	5	5	4
釧路	3	4	3	2	3	3
根室	2	2	2	2	2	2
余市	1	1	1	1	2	2
古平	1	1	1	1	1	1
磯谷	1	1	1	1	1	1
稚内	1	1	1	1	2	2
増毛	1	1	1	1	1	1
帯広	1	1	3	4	5	5
浦河	1	1	1	2	1	1
厚岸	1	1	1	1	1	1
網走	1	1	1	1	2	3
歌島	1	1	1	1	1	1
滝川	1	1	1	1	1	1
滝川	1	1	2	2	2	2
利別・池田	1	1	1	2	1	1
名寄	1	1	2	2	2	2
留寿	1	1	2	1	2	2
野付牛	1	1	2	3	3	3
霧多布	1	1	1	1	1	1
深川	1	1	1	1	2	2
士別	1	1	3	2	2	1
倶知安	1	1	1	2	2	1
狩太	1	1	1	1	1	1
美幌	1	1	1	1	1	1
紋別	1	1	1	1	2	2
美幌	1	1	1	1	1	1
美幌	1	1	1	1	1	1
江別	1	1	1	1	1	1
料里	1	1	1	1	1	1
富良野	1	1	1	1	2	2
栗山	1	1	1	1	1	1
由仁	1	1	1	1	1	1
森	1	1	1	1	1	1
滝川	1	1	1	1	1	1
積丹	1	1	1	1	1	1
八雲	1	1	1	1	1	1
苫小牧	1	1	1	1	2	1
虹田	1	1	1	1	1	1
長沼	1	1	1	1	1	1
余別	1	1	1	1	1	1
西紋	1	1	1	1	1	1
伊達	1	1	1	1	1	1
遠軽	1	1	1	1	1	2
鬼取	1	1	1	1	1	1
豊泊	1	1	1	1	1	1
羽幌	1	1	1	1	1	1
香深	1	1	1	1	1	1
札文	1	1	1	1	1	1
夕張	1	1	1	1	1	1
虻田	1	1	1	1	1	1
静内	1	1	1	1	1	1
各年『北海道庁統計書』	62	82	101	108	127	125

岩佐所長は札幌出張所でしたから下のレベルでしたが、道内総括店にしたのです。銀行の中の銀行も札幌に移ってきたことになりました。それまで日銀は小樽にありました。日銀の移転により小樽と札幌の金融界での位置づけが逆転したという評価になっています。今までの研究史でいくと、決定的なのが日本銀行札幌支店が開かれたことです。

表の下半分は、戦後の分です。それに加えて⑫-3をつくりました。戦前からあった銀行と戦後に増えてくる銀行を一覧表にしたものです。戦後は、札幌が金融的にも優位になり、都市銀行の多くが札幌に支店を開いていきますし、地方銀行も札幌の資金を求めて入ってきます。多分、移住者の関連性も含めてだろうと思いますが、岩手、埼玉、青森などの地方銀行も札幌に入ってきます。札幌に金融機関が増えていっている様子が戦後はっきり出てきています。では、小樽や函館はというと、そういう資料がなかなか見付けられなくて、札幌だけの話になってしまいましたが、今の札幌と小樽と函館と比べれば明らかだろうと推測できます。

⑬は、産業人口の増加を示したグラフです。1920年以降ですが、第三次産業人口が多数を占め、そしてシェアも大きくなっていることが、一目でわかります。役人・銀行員・会社員が増え、それに伴い飲食店や様々な小売商が増えてい

るだろうと言うことが推測できます。後半の話では、役所が札幌に集まってくるのに従って、金融機関も札幌に集まってくるというお話をしました。それらの機能の集積により都市を比較する研究もあります。それは、各都市に、国や都道府県の出張所ないしは出先機関が幾つあるか

⑫-2

大正	21	4	第一銀行、札幌支店、北海道銀行合併
	31	8	不動産貯蓄銀行、札幌に出張所、8年支店
	31	10	共済貯蓄銀行、札幌に支店
	31	12	泰北銀行、本店を小樽移転
	81	12	北海道殖産銀行、札幌に支店、のち廃止
	91		中立銀行、小樽銀行と改称
	111	11	拓殖貯蓄銀行、北門銀行と改称、札幌支店
	111	11	三菱銀行、のち千代田銀行と改称札幌へ
	111	11	拓殖貯蓄銀行の貯蓄銀行部門から北門貯蓄銀行、札幌支店
	121	11	第三銀行、安田銀行と改称
昭和	21	3	十二銀行、苗穂出張所
	31	1	安田銀行、札幌支店
	31	3	百十三銀行、北海道銀行と合併
	41	12	小樽銀行、北海道銀行と改称、
	111	11	横濱正金銀行、小樽に支店
	121	11	日本興業銀行、札幌に北海道支店
	141	2	北門貯蓄銀行、北海道銀行と改称
	141	12	北門銀行、拓殖に合併
	161	10	泰北銀行、北海道銀行に合併
	161	10	北海道商工銀行、北海道銀行に合併
	161	10	北海道殖産銀行、北海道銀行に合併
	171	1	日本銀行、札幌支店、道内総括店
	171	5	横濱正金銀行、札幌に出張事務所
	171	8	住友銀行、札幌に支店
	181	4	第一銀行、三井銀行と合併し帝国銀行
	191	9	北海道銀行、拓殖に合併
	201	5	北海道銀行、拓殖に合併
	211	5	三菱銀行、札幌支店開設
	211	9	横濱正金銀行、札幌出張所、のち東京銀行
	211	11	日本勧業銀行、札幌出張所、24年支店に
	221	4	三和銀行、札幌支店開設
	231	7	日本貯蓄銀行、協和銀行改称、札幌支店
	231	8	安田信託株式会社、中央信託銀行に改称
	231	10	三井銀行、札幌支店開設
	231	10	三菱銀行、千代田銀行と改称
	231	10	帝国銀行、第一銀行分庫、札幌支店開設
	231	10	第一銀行、札幌支店を継承
	231	10	安田銀行、富士銀行と改称
	251	12	大陸銀行、豊平・苗穂出張所支店に
	261	3	北海道銀行設立
	261	10	日本興業銀行、札幌に北海道支店
	271	1	日本開発銀行、札幌事務所開設、9月支店
	271	6	中央信託銀行、安田信託銀行に改称
	271	12	大和銀行、札幌支店開設
	281	2	日本長期信用銀行、札幌支店開設

北海道拓殖銀行調査部調査資料第二十二集『北海道金融機関沿革史』昭和28年4月

⑫-3

札幌市内金融機関

戦前 三井銀行、日本銀行、日本興業銀行、住友銀行、安田銀行(富士銀行)、日本貯蓄銀行(協和銀行)、十二銀行支店(北門銀行)、安田信託銀行、不動産貯蓄銀行支店、第一銀行支店、共済貯蓄銀行、北海道拓殖銀行、北海道殖産銀行支店、小樽銀行支店、北門貯蓄銀行本支店、北海道銀行支店、北門銀行、札幌銀行。

昭和21年 三菱銀行、横濱正金銀行(東京銀行)札幌出張所(22年支店昇格)、日本勧業銀行札幌出張所(24年支店昇格)

昭和22年 復興金融公庫札幌支所(後日本開発銀行)、三和銀行

昭和23年 帝国銀行

昭和24年 国民金融公庫札幌支所

昭和25年 住宅金融公庫札幌支所

昭和27年 日本開発銀行札幌事務所(同年支店昇格)、大和銀行

昭和28年 日本長期信用銀行、秋田銀行、三菱信託銀行

昭和30年 中小企業金融公庫、三井信託銀行

昭和31年 北海道開発公庫(32年に北海道東北開発公庫に改称)

昭和33年 農林漁業金融公庫、第四銀行

昭和34年 東海銀行、神戸銀行

昭和37年 東洋信託銀行、日本不動産銀行

昭和38年 弘前相互銀行、住友信託銀行

昭和39年 中央信託銀行

昭和40年 岩手銀行、埼玉銀行

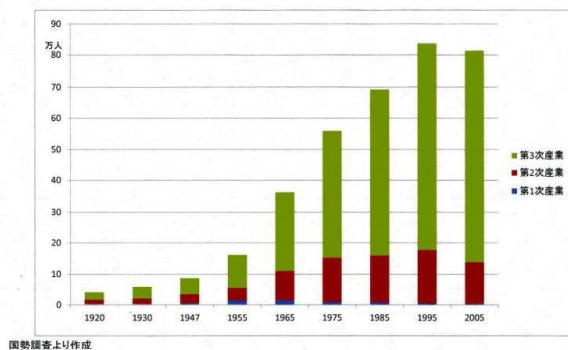
昭和42年 青森銀行、山形銀行

昭和44年 太陽銀行

昭和47年 徳島相互銀行、七七銀行

『札幌市史第4巻通史4』『札幌市史第五巻通史5上』

⑬



順位を決めていきます。中枢機能の集積という言葉を使っていきます。役所の集まりを政治的中枢の集積と言い、金融関係や会社が多くなることは、経済的中枢機能の集積と言います。その外には、文化的中枢機能の集積という見点もあります。

⑭は、『札幌市政概要』という札幌市が政策や事業を紹介・説明する報告書で昭和47年以降毎年出版されています。それに全国の大都市の中枢機能や道内の都市の中枢機能の比較をしています。全国的に札幌は、4番目、5番目の順位に入っています。北海道内では、平成4年の数字で、ほかの都市に比べて断トツの数字になっています。

今回の話は、政治中枢機能や経済中枢機能が札幌に集積し始めるのが明治末からで、それらの集積が有効な強い力になったのは戦争が終わる直前ぐらいのことでした。そして戦後になると、道内ではその力が十二分に発揮され、札幌のひとり勝ちという形になってしまった、ということです。

もう一度繰り返しますと、明治20年代ぐらいから都市機能を発達させていく札幌、その後大発展をするための素地が役所の集積、金融機関の集積が進むようになり、それが最終的に戦後に大発展し、札幌だけが190万人も集まる様な大都市になったということです。

これがきょうの話です。私も、この中枢機能の話をするのが初めてですから、うまく説明ができたかどうかわかりませんし、自分が求めていた資料がいろいろなものを探してもなかなか出てこなくて、先ほど言ったように各都市の銀行は昭和10年までは出てきたのですけれども、昭和15年が出てこないという片手落ちのところがあります。今後、そういう数値も探しながら、中枢機能の集積で札幌がひとり勝ちしていく様子をもう少し具体的に見ていけるようにしていこうと思っています。

